

看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

第2章

〈いのちの諸相〉

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

Center for the Study of Communication-Design, CSCD

池田 光穂

IKEDA Mitsuho

民族学

- 民族学は、民族に関する学問であった。民族（エトノス）とは、特定の文化・習慣を共有する人々のことであり、ある時には地域の特定の集団、またある時にはおなじ集団の構成員である意識を共有する人たちのことをさしている。
- 民族の定義を人間の集団のひとつと考え、民族についての学問である民族学と、人間についての学問である人類学と、人間集団の文化についての学問である文化人類学と、社会という人間集団についての学問である社会人類学、あるいは、人々の語り（folklore）についての伝承的構成である学問である民俗学（日本語の発音は、みんぞくがく）は、それぞれ、学問の名称は異なっているが、共通する部分は多い。

ブキドノンの出産

- 「出産の 때가 やってくると、産婆はその女性を居間の床の上に寝かせ、腹をこする。子供が生まれるやいなや、産婆は臍の緒を切り、後産を取り除く。これは最初は汚い布で、次に立派な布で包まれる。なぜならそれは赤ん坊の兄弟だからだ。それは動物の手の届かない家の階段とか、ストーブの下に埋められる。すぐにそれは土になるが、その霊は空に昇り、その子供のモリン・オリンとなる」

ナグアル・ナワール

- マヤを含めたメソアメリカと呼ばれる文化圏では、ナグアルあるいはナワール (nagual, nahual) に関する信仰がある。アステカのナワトル語ではカレンターと日付に関連づけられた動物（あるいはそれに励起させられる力）を意味するトナルあるいはトナリ (tonal, tonalli) という語がある。ナワトル語で tonal-li は太陽の暖かさ、夏期、そして日にちの意味があるからだ。これらによると、各人にはそれぞれに対応する動物（コヨーテ、イヌ、ウサギ、シチメンチョウ、ジャガー、サルなど）がいて人間と同じような人格をもち、かつそれぞれの価値観をもってまったく別の世界で生きている。これらのナグアル動物は、それに対応する人間に善良あるいは邪悪な力をもっており、さまざまな形で対応する人間の生活を支配する。人はシャーマンや伝統的慣習 (costumbre) の司祭の助力なしにはそのナグアルを知ることできないし、その動物の種類がわかったとしても、どの個体が自分のナグアルかもわからない。次のことばを参照：「君のナグアルが死ぬとき、君も死ぬ。あるいは君が死ぬときには、君のナグアルも運命をともにする」。

マーガレット・ミード

- 1920年代末のマヌス島民は、自然に流産した、あるいは墮胎した子供に対しても一人前の名前がつけられ、「完全な人間」であるかのように取り扱われました。それらは、何年も後になってみると、流産か、死産か、生後死んだ子どもかが区別できなかったそうです。そして、すでに死んでいて、その「からだ」をみることができない子どもたちにも、財産が割り当てられ、諸行事においてもあたかも人格があるかのように取り扱われたと報告

水の洗礼

- 伝統的なカトリック神学では、洗礼を受けない子どもは、死亡したときに地獄にも天国にも行けず、リンボ（辺獄）に住むと言われていました。カトリックの民衆信仰（フォークロア）には、このような子どもたちの魂は、心の平安を得ることができず、幽霊や夜行性の鳥になって現世に現れると言われていました。

伝統的カソリックにおける身体の意味

- 日本では火葬を行うという話を村人に話したら、彼らは眼の色変えて次のように筆者に訴えました。「おお神様！ 肉体がなければ、キリストとともに天国に昇天できないではないか？ もし君が死んでも、頼むから君の死体は絶対に燃やさないでくれ」

チョコレート＝邪悪な鳥

- 赤ん坊への洗礼を急ぐもう1つの理由は、正統なキリスト教信仰からは、いささか逸脱している土着信仰的な色彩がより強いものです。それは、チョコレートという邪悪な鳥が真夜中に洗礼を受けていない赤ん坊を襲い、吸血することによってこれを殺すというものです。チョコレートは「水の洗礼」を受けた子どもは襲うようなことはない。また、チョコレートは魔女(ブルバ)の変身したものである、とも聞き及びました

手当ての重要性

- 「手当て」は、人間の治療的な行為の中で最も原始的である、としばしば言われます。確かに、止血をしたり痛みを和らげる行為として、手を当てたり、擦ったりすることは、人間以外の動物にはほとんど見られない行動です。動物は傷口を舐めることをしますが、しばしばそれが傷口を広げることになり、有効性については功罪相半ばする議論があります(効用のもっとも有名な説明は、唾液中に殺菌成分があるというもの)。手当ては他人に対して行われるとき、はじめて社会的な意味での治療行為となります。したがって自分に対する手当てと、他の病人だ人に対する治療行為あるいは宥和的行為としての手当ては、一応区別して考えることが重要でしょう

ロイヤル・タッチ

- 皮膚病、癩癧(てんかん)、瘰癧(るいれき)(後に頸部リンパ腺結核と解釈)などに罹った病者の顔、首、頭などに国王が触れると、病気が治ると信じられていました。また、その王様の行状を記した記録では「確かに治癒した」とあります。治療された病気の中でもとくに瘰癧への治癒が多かったために、この病気は「王の病気」(the Kings Evil)と言い換えられるようにまでなったといえます。国王は訪れた民衆に手で触れるだけでなく、特別な祈りの言葉をかけ、聖水で清め、国王の指輪に触れさせ、銀貨を与える場合もあったようです。

手当ての意味

- 治療の普遍性を信じ、歴史の中にそれを発見するという営為は、手当てが「治療の原型」であると思いついてきた学者たちの希望の投影なのではないかと思えます。近代医療が忘れてしまった「手当て」の理想を対抗的にあえて強調するのは、近代医療を批判的に乗り越えようとするむしろそのような人たちの認識と行動にあると思えます。近代医療は、手当てを否定したところにその成立基盤をもつと言う方が適切でしょう。

文献

- 河合利光, 1990 「後産の力：プキドノン族におけるキョウダイの守護霊」 『園田学園女子大学論文集』第24号, Pp. 113-130.
- Mead, M., 2001, Growing up in new Guinea: A comparative study of primitive education. New York: HarperCollins.
- Bloch, M., 1989, The royal touch. New York: Dorset Press. (マルク・ブロック, 1998 『王の奇跡：王権の超自然的性格に関する研究, 特にフランスとイギリスの場合』 井上泰男, 渡邊昌美訳, 刀水書院)